RE START
太田哲也の10年

［連載8回］

TEXT●中三川大地（*Daichi Nakamigawa*）
PHOTO●降旗俊明（*Toshiaki Furihata*）

日本のエンツオ。

「日本一のフェラーリ遣い」と、太田哲也を呼ぶことがある。その理由は決してフェラーリでレース活動をしてきたからだけではなかった。フェラーリコレクターにしてフェラーリ美術館を創設した松田芳穂さんの多大なる協力があってこそ得た称号だ。今回、日本のフェラーリ文化を深化させ、より発展させてきたふたりの当時のエピソードや、またその"絆"に迫る。

フェラーリ美術館のスポットライトを浴びて佇んでいた銀色のディーノは、いま太田哲也のもとで蘇りつつある。太田本人があの事故に遭ったことで、放置され朽ち果てつつあった個体をまるで新車と見間違うばかりに再生させる……そのエピソードについてはかねてより本連載でお伝えしてきた通りである。

このディーノ246GTは美術館のオーナーであり、同時に日本有数のフェラーリコレクターでもあった松田芳穂さんから譲り受けた。

「ある時、松田さんとクルマに乗っていたんだ。その時に"太田くんはフェラーリのどのモデルが好きなんだい？"と聞かれた。"いつかディーノに乗りたいですね"と言ったら"じゃあウチに1台あるから譲りましょう"とあっさり話が決まった」

ディーノのような、ともすれば世界的に貴重な文化財と言ってもおかしくないクルマをサラリと譲ってくれたのだから、その当時から、松田さんと太田の間にはよほどの信頼関係が結ばれていたのだろう。

その頃、フェラーリは世界的なワンメイクレースを行うことを決定。フェラーリの正規輸入販売を手掛けていたコーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド（以下、コーンズ）と、フェラーリ公認オーナーズクラブ『フェラーリ・クラブ・オブ・ジャパン』の協力のもと、フェラーリだけのワンメイクレース『フェラーリ348チャレンジカップ』が始まっていた。レースの発足は1993年。太田は当初から、レースへ参戦するジェントルマン・ドライバーたちに運転を教える講師にと白羽の矢が当たっていた。

松田さんは言う。

「当時、バブル経済の影響があって、日本でフェラーリを所有する人は増えていた。だけど、たいせつに仕舞い込んで減多に走らせない人がほとんど。愛でる人は腫れ物に触れるように扱い、投機対象としてしか見ていない人もいる。サーキットなんてほとんどの人間が未経験でした」

そのため、レースを開催するにあたりドライビングスクールをセットで同時開催し、スキルの底上げを狙ったのである。348LMやF40GTEなどのレーシング・フェラーリを駆ってル・マン24時間を闘った経験から、太田は名実ともにスクールの校長に相応しい人物だった。また松田さんは言う。

「サーキットマナーなんて、まったく知らなかったですよ。特にフェラーリを転がす人は、みんな"自分が一番偉い"と思っているから、走行中に周りなんか見やしないし、自分が一番速いとまで思っている。ところが、いざサーキットを走ると全然違うんですよ。最初は怖かったけれど、先生（太田哲也）の教えに従って走ると、安全だし、なによりだんだん速くなって楽しくなってくる。先生は私にフェラーリの本当の走らせ方というものを教えてくれた。今でも感謝していますよ」

当時クラブ員でフェラーリ・チャレンジに参戦する人の多くが同じ想いを抱いていたという。なにより太田の指導は画期的だった。座学として運転を教えるだけではない。太田自身のドライブによる先導走行や同乗走行により、模範を徹底的に見せる。とても実践的で分かりやすかったのだ。なお、ここで考え得た「速さよりも安全。そしてマナー。互いにリスペクトしあうことの重視」という太田流の教習は、昨今彼が積極的に推し進めるドライビングレッスンの元祖となった。

ヴィンテージカーズ代表
松田芳穂氏

まつだよしほ。1979年にコレクションを集めた「軽井沢古典車館」を設立。その後、御殿場に「スポーツカー博物館」「フェラーリ美術館」他を相次いで開設する。フェラーリ普及に努めた功績から、イタリア共和国から"コメンダトーレ章"(勲二等)を受章。コメンダトーレと呼ばれていたエンツォ・フェラーリとイメージが重なる。

療養生活中に松田氏から贈られた時計などを太田氏は今でも大事に保管している。他にもフェラーリ・クラブ・オブ・ジャパン(松田氏が創立に大きく貢献)からも折にふれて記念品が届いている。

「当時のフェラーリは、一般の方には運転が難しいと感じていた。近頃のモデルのように電子制御で守られているわけじゃない。事実、フェラーリは万能だと勘違いした結果、公道でさえスピンやクラッシュをした例が後を絶たなかった。しかも教える相手はサーキット経験のない人ばかり。それでレースをしようというのだから、これは相当に力を入れて教えなきゃいけないぞ、と思った」

そんな太田の意気込みを受け、皆は腕を上げていった。松田さんを例に取ると、毎回10秒以上のタイムアップもあったほどだ。サーキットデビューが50歳を超えていた松田さんのバイタリティにも驚かされる。

松田さんは講師としては無論、人としても太田を信頼し、ディーノを託したのだろう。ふたりの関係はそれだけに留まらない。松田さんは当時、30台近くの貴重なフェラーリを所有していたが、そのほとんどに事あるごと太田を乗せたのだという。

少々下世話だが、何億円もする世界的に貴重なヒストリック・フェラーリを所蔵した「フェラーリ美術館」という名前を聞く限りは、並べられたフェラーリは滅多に動かすことないよう保管されていたかに思われる。だが松田さんは、それでは意味がないと断言する。ほとんどの個体は動体保存され、気が向けば松田さんは何千kmでも臆することなく走らせる。それはいまも一貫して変わらない。

「フェラーリもクルマなんだから、走らせなければ意味はない。私は1年で1・5万km走るフェラーリもあるし、数台で4~5000km走る月もザラです。大事に仕舞い込むだけでは、逆に勿体ない」

そうした考えから、自分では乗りこなすのが難しいレーシングカーなどの場合、サーキットアタックやシェイクダウンテストのドライバーとして太田を指名した。雑誌記事として取り上げる際も松田さんは協力的で、快く提供してくれた。こうした経験は、"フェラーリ遣い"としての太田を、より深化させた。フェラーリでレースをするのと同時に、往年の各モデルを掌握していけたからだ。

「例えば250GTOからLMでガラっと挙動が変わってきたとか、カタログを眺めただけじゃ伝わらない部分を身体で理解できるようになった。それを知ることができたのは俺の財産だと思う」

だが、太田が校長を務めた348から355チャレンジを経て、時代が360チャレンジへと移行する直前に、太田はあの大事故に遭い、その活動にピリオドを打たざるを得なくなってしまう。松田さんもまた身体がついていかないことを理由にレースを辞去する。

それでも事故で入院している太田を松田さんは常に気にかけ、事あるごとにお見舞いの品を贈るなど心配りを欠かさなかった。それもありきたりの品ではなく「ドラえもんの腕時計」や、物音に反応して「Don't worry, be happy」と歌う魚のおもちゃもあった。そんなユニークな贈答品が、ふさぎ込みがちな三年間の長期療養生活の中にあった太田を、強く励ましたことは想像に難くない。

談笑するふたりの様子はまさに親子のようで、フェラーリを日本に広めた松田氏がエンツォなら、太田氏はまさに彼の愛息、ディーノ。奇しくも松田氏から太田氏には、ディーノ246GTが譲られている。

「療養中、最初はみんなコミュニケーションを取ってくれるけど、だんだん社会から忘れられるという不安にかられてくる。世の中と接点がなくなることが怖かったんだ。だけど松田さんはたびたび贈り物をしてくれて、"あぁ、まだ必要としてくれているんだな"って安心した」

互いにリスペクトしあい、とてもいい関係を築いたふたり。美術館までつくって日本のフェラーリ文化を根底から支えた男と、思う存分フェラーリで走り、かつ己の技術と夢を皆に分け与えた男。彼らが関わった348、355チャレンジの時代は、いま思い返すと実に濃密な時間だ。コレクターを筆頭とした所有者たちは、フェラーリを美術工芸品のごとく仕舞い込み表に出さず、一般人は遥か彼方の手の届かない存在だと思いこんでいた。そんなフェラーリ・ワールドを、臆することなくメディアや美術館で公開し、なにより全開で走らせたことは、日本におけるフェラーリ文化に多大なる影響を及ぼしたと思う。彼らがいなければ、いまだにフェラーリは"走らないクルマ"とされていたかもしれない。

現在、71歳になった松田さんだが、いまなお複数台のフェラーリを所有し、どこへでも連れ出すという。大事にしつつも走らせなければ意味がない。そのスタイルを貫く彼はとても格好いい。日本にこのようなフェラーリ文化を芽生えさせたという意味で、彼にこそ"日本のエンツォ"という言葉を贈りたい。

フィオラノにチャレンジドライバーと赴き、モンテゼーモロ氏と記念撮影。この348チャレンジと、その開催に率先して尽力した松田氏によって、日本におけるフェラーリが"走って楽しむクルマ"へと変貌したと言っても過言ではない。ここからフェラーリ文化が日本に根付いた。

開催決定!

太田哲也×GENROQ
Tetsuya Ota ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON
with JAGUAR & LAND ROVER supported by 出光

太田哲也氏が主宰する「Tetsuya Ota ENJOY & SAFETY DRIVING LESSON by出光」が、GENROQと初コラボレート開催。通常のサーキット初心者からでも無理なく参加できるスクールとともに、スピンオフ企画として、スパタイGP(スーパータイムアタックグランプリ)第6回も開催予定です。GENROQ読者の皆さんも「安全&マナー」について、太田哲也校長はじめとする講師陣から教えてもらえるチャンスです。今回はジャガー・ランドローバー・ジャパンの協力により、教習車両にはジャガーを予定。サーキット内のコースをプロドライバーによる同乗体験走行にて楽しめます。また、パドックにおいてもレンジローバー・イヴォークなど最新車両の体験試乗コーナーを設置する予定です。講師が先導する「先導走行」の際には、同伴者の方も一緒に参加者車両に乗車可能で(定員まで乗車可能)、ご家族やお子様もご一緒に乗って先導走行を楽しめます。ぜひ、皆様奮ってご参加ください。

開催概要(予定)
■日時:12月22日(土)
10:00~17:30(走行時間は午後)
■場所:袖ヶ浦フォレスト・レースウェイ
■内容&参加費:
サーキットクラス　2万円(ランチ込み)
入門クラス　1万2000円(ランチ込み)

お問い合わせ・お申し込み先
〒224-0006 横浜市都筑区荏田東2-9-1
(株)ATOI内太田哲也スポーツドライビングスクール事務局
☎045-948-5540 FAX 045-948-5536
e-mail info@sportsdriving.jp
URL http://www.sportsdriving.jp

SAMPLE